

いといふ證據として充分であつてイラン人がuの音を加へなければ此語を發音することが出来ないからしてかく二綴字として記されて居るのだといふて居る。

以上述べた様なわけで、この碑文は回鶻語と見るよりも Sogd 語と見るべきものである、Sogd といへば、勿論 Zaratšān 河の流域地方、Samarkand を中心とした一帯の地方をいふので、支那史に粟戈、粟特などと書いてあるのは Hirth 氏などの議論のあるに係はらず自分は尙ほ之を指したものと思ふ、此地方の言葉で書いたものが遙か東の外蒙古地方に残つて居るといふのは一寸不思議に思はれると共にまた甚だ面白きことと言はねばならぬ、既に三世紀に波斯で禁遏せられた摩尼教は其後東方では Sogdiana の邊に引き續いて行はれて、此處より漸次傳播の道を求めた様である、新疆、蒙古地方の民族の間に布教したのももとより此地方の僧徒であつて、従がつて今日新疆地方から發見せらるゝ史料について考がへて見ても此言葉が當時の摩尼教僧侶の通用語であつたと思はれる、而して唐に武后延載の頃もしくは玄宗開元の頃に此教が入るより以前に既にトルコ種族の間には盛に之が信ぜられて居たのである、漠北回鶻の碑文に摩尼教のことが見えて居るのは即ち此爲であつて、Sogd の言葉が其の碑文に見えて居るのもまた此理由に外ならぬ、そうして此 Kara Balgassun 碑文なるものは Kozlov 氏等の持ち歸つた碑より以前既に一八九二年に Radloff 氏によりて寫眞せられて出版せられたものである。

從來甚だ曖昧の間に葬られてあつた東方の摩尼教の消息が今日では漸次明らかになつて來たのであるが、今また此文獻の新解釋によつて此宗教と共にその本國の國語の東漸に就てもまた一新事實を知ることが出來て、長き學者の迷ひを醒すに至つたのは極めて快心のことといふべきである。

(藝文第三年第一號、明治四十五年一月)